

短編集「心の中を流れる河」より 参考資料一覧 第144回 福永武彦研究会 2014.1.26 配布資料

対象作品:「心の中を流れる河」、「秋の嘆き」、「風景」、「死神の馭者」、「幻影」、「一時間の航海」、「鏡の中の少女」

「夢見る少年の昼と夜」の参考資料一覧はHPに掲載済。

\* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、執筆者の意図と一致しているかどうかは不明です。

1. 福永自身による言及など

No.	タイトル	著者	書名(出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
0	「心の中を流れる河」初出と書誌	—	福永武彦全集 第4巻 (新潮社)	—	1	・初出:「群像」昭和31年(1956)12月号 ・単行 1.「心の中を流れる河」初版。昭和33(1958)年2月東京創元社刊。四六判、フランス装、函入。装画:菅野陽。本文269頁。内容:「夢見る少年の昼と夜」、「秋の嘆き」、「風景」、「幻影」、「死神の馭者」、「一時間の航海」、「鏡の中の少女」、「心の中を流れる河」。 2.「心の中を流れる河」新版。昭和44(1969)年9月人文書院刊。四六判、紙装、函入。装画:駒井哲郎。本文272頁。内容は1に同じ、及び「再版後記」(著者)。 3.「ちくま日本文学全集 福永武彦」に収録。平成3年(1991)9月筑摩書房刊。文庫版。本文477頁。内容:「心に流れる河」、「幼年」、「遠方のバトス」、「深淵」、「完全犯罪」、「岡鹿之助の詩的世界」、「ゴッホとゴーギャン、内面の道」、「夜」及びその他のソネット」、「詩と転生」及びその他の詩
0	「秋の嘆き」初出と書誌	—	同上	—	1	・初出:「明窓」昭和29年(1954)11月号 ・単行 1、2とも上に同じ。 3.「夢見る少年の昼と夜」新潮社文庫版。昭和47年(1972)11月刊。カバー装画:麻生三郎。本文317頁。内容:「夢見る少年の昼と夜」、「秋の嘆き」、「沼」、「風景」、「死神の馭者」、「幻影」、「一時間の航海」、「鏡の中の少女」、「鬼」、「死後」、「世界の終り」、及び「解説」(篠田一士)。
0	「風景」初出と書誌	—	同上	—	1	・初出:「新潮」昭和30年(1955)11月号 ・単行 1、2、3とも上に同じ。
0	「死神の馭者」初出と書誌	—	同上	—	1	・初出:「群像」昭和31年(1956)2月号 ・単行 1、2、3とも上に同じ。
0	「幻影」初出と書誌	—	同上	—	1	・初出:「文学界」昭和31年(1956)2月号 ・単行 1、2、3とも上に同じ。
0	「一時間の航海」初出と書誌	—	同上	—	1	・初出:「別冊文藝春秋」第56号(1957年2月) ・単行 1、2、3とも上に同じ。
0	「鏡の中の少女」初出と書誌	—	同上	—	1	・初出:「若い女性」昭和31年(1956)7月号 ・単行 1、2、3とも上に同じ。

1	「心の中を流れる河」新版後記	福永武彦	「心の中を流れる河」新版 福永武彦全集（新潮社）第4巻に所収	1969/7	2 （全集）	私が（再版に）気の進まなかった原因の一つは、この中に含まれている中篇「心の中を流れる河」を、出来ることなら目録から削り取ってしまいたいと思っていたからである。というのはこの作品に自信がないという意味ではない。この中篇の素材をもう一度解きほぐして、私は「夢の輪」という長篇を構想し、既にその第一部は昭和35年から36年にかけて或る雑誌に連載した。最初に中篇として書いたものとは、筋も主題もやや違うもので、ただ主要な登場人物が重なり合っている。そして私は長篇の第二部以下をこの後書き継ぐつもりだから、最初の中篇を人目に曝さない方が、作者の手の内が見すかされないで済むだろうというふうに考えた。（引用）
2	「小説の発想と定着」菅野昭正との対談	福永武彦	「国文学」昭和47年11月号  福永武彦対談集「小説の愉しみ」（1981）所収	1972/11		福永：「河」では一種の、此岸と彼岸ですか、こちら側と向こう岸ですね。要するに、向こう側は「夢の世界」、「マラルメ」的な「夢」ですね。そういう意味では、河は此岸と彼岸とを暗示するもので、「流れてゆくもの」という感じじゃないと思うのです。「心の中を流れる河」では、そうじゃなくて「流れてゆくもの」としての河で、それはつまり、「心」というものが流動するものであるという意味で、人間の内面を一種の河にたとえたわけでしょう。「忘却の河」もそうだと思うのです。
3	「文学と遊びと」清水徹との対談	福永武彦	「解釈と鑑賞」昭和52年7月号  福永武彦対談集「小説の愉しみ」（1981）所収	1977/7		福永：「心の中を流れる河」という短篇を書いて、それは大変気に入っている作品なものですから、あの頃は僕は長篇の申し込みがなかったもので、結局その材料を中篇に書きちゃったけれど、どうしてももっとたくさん書きたいので、それを解体して、つまり「心の中を流れる河」を消してしまって、その代り新しく同じ人物を使って別の作品を書くという発想のもとに書き出したら連載が1年経っちゃったんで打ち切られたんで、結局中途半端で終わったわけですね。最初の計画だとそのまだ倍ぐらいあるものですから。それを書こうと思っているんだけどもちっとも書けなくて……。
4	「フォークナーと私」	福永武彦	「ウィリアム・フォークナー」2巻1号（南雲堂）  福永武彦全集（新潮社）第18巻に所収	1979/6	6 （全集）	「ヨクナパトーフア」という架空の舞台を設定したことは、しかもその舞台に同じ人物を繰り返し登場させることは、フォークナーの甚だ魅力的な特徴である。（中略）1956年に、「心の中を流れる河」という中篇の中に、北海道の奥地に寂代という町を設定し、それよりも更に奥地に、弥果という町をもつた。私はこの舞台が気に入ったので、その3年後に「世界の終り」という中篇でも同じ舞台を用いた。（中略）その2年後に私は「夢の輪」という長篇を雑誌に連載し、「心の中を流れる河」と同じ舞台に同じ人物たちを登場させて、別の小説を書こうとした。もしもその小説が完結していたら、私は私の寂代物をもっと書いたかもしれない。私はしばしば「ヨクナパトーフア」を羨望し、寂代や弥果に私の人物たちがさ迷う場面を空想するが、それに作品として形を与えることは未だに出来ないでいる。恐らくフォークナーが、そのモデルである土地を、そこに生まれ住んだことで熟知していたのに対して、私は北海道にわずか足掛け3年しかいたことがなく、土地はただ浪漫的な印象を与えたにとどまる、という相違があったためであろう。（引用）

## 2. 単行本

No.	タイトル	著者	書名(出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
1	心の音「心の中を流れる河」	首藤基澄	福永武彦・魂の音楽（おうふう） 第5章 心の音「心の中を流れる河」	1996/10	9 （第5章）	「心の中を流れる河」は、誠実で小心な門間牧師が、「かすかな物音」を聞くところから始まり、寂代の河の音を聞く梢の生の寂しさを表現するところで終る。主人公を章ごとに変えながら、それぞれの内部を照射することによって、心の音を聞くのである。そこでは、現実の猥雑さはきれいに除去され、一つの秩序が与えられている。  河の音を魂の音楽の象徴とすれば、寂代河は梢の寂しさの象徴であり、ひいては福永の生の象徴とみてもいい。「氷の混った水が流れていて、あの音を聞いていると身体中が寒くなる。」という寂代河と同様に、一度は魂の凍りつくような体験をした人物の魂の律動がそこから伝わってくる。（引用）

2. 文芸関連雑誌

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	福永武彦全作品解題 「秋の嘆き」、「心の中を流れる河」	首藤基澄	「国文学」第25巻9号 福永武彦へのオマージュ	1980/7		「秋の嘆き」:過去と現在を往復する緻密な構成で、孤独な生と死を追及している。 「心の中を流れる河」:孤独な生の内部を捉えた抒情掬(きく)すべき作品である。(引用)

3. 新聞、文庫/全集 解説他

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	文芸時評 「風景」について	川上徹太郎	「東京新聞」夕刊 昭和30年10月28日	1955/10/28		こういうシニックな男と陰に籠った女の出会いを山国の田舎町の背景で扱おうと、何か感傷的な舌に重い味が残りはしないかと心配されたがそれがなくて後味がよかった。(引用)
2	文芸時評 11月号 「風景」について	富士正春	「図書新聞」 昭和30年11月5日	1955/11/5		『新潮』という雑誌は作品に重きをおくというよりは、作家の持味をちよいと出させて、その取り合わせで勝負するといった感じがして、何か作家が衰れなような気もする。みんな、それぞれ持味は出さされていること、堀田善衛の「曇り日」、福永武彦の「風景」、中村真一郎の「誤解」、檀一雄の「誕生」どれを取ってもそうで、短篇小説は作家というメーカーの名刺的見本みたいなものになってしまったのかとゾツとした。(引用)
3	文芸時評 「死神の馭者」について	平野謙	「毎日新聞」 昭和31年1月21日	1956/1/21		いつものようなややとりすました作風とはちがって、みすぼらしいアパートに住む独身の青年と近所の運ちゃんの子とを組み合わせ、現代の追いつめられたノイローゼ的心象風景を巧みにまとめあげている。(引用)
4	2月号の文芸雑誌から 「死神の馭者」について	十返肇	「北国新聞」 昭和31年1月25日	1956/1/25		題名がいささかもものしいが、淡々とした筆致で貧乏で不幸な運転手父子と「私」の関係をかいていて読ませる。この作者も数年前、西欧近代小説の模倣じみた小説を書いていたときにくらべると、作風が変化したものである。(引用)
5	文芸時評 2月号 「死神の馭者」、「幻影」について	荒正人	「日本読書新聞」 昭和31年1月30日	1956/1/30		私はむしろ「第一の新人」の仕事に信頼感を抱いた。中村真一郎の「暗い森」の回想と心象風景をないまぜにした落ち着いた仕事ぶりに心惹かれた。福永武彦の「死神の馭者」、「幻影」などの素直に気負っている態度に今後の望みを託した。(引用)
6	2月号の総合、文芸雑誌の創作 「死神の馭者」、「幻影」について	山室静	「北海タイムス」 昭和31年1月30日	1956/1/30		福永の2作「死神の馭者」、「幻影」はイーージーに筆を運びすぎる。この人は、他の作家が粗雑に見過ぎしがちな魂のヒダにも目のとどく作家と思っていたが、どうやら、その興味のもち方は単に知的な興味本位で、その扱い方はだんだん通俗作家めいて、その師堀辰雄とは離れてきた。堀には知的構成はあったが、それはあくまでも自己の切実な体験を核にしたものであり、この核を私とは独立な作品として客観化するための操作であったのに、福永には根底となるこの体験が欠如しているかのようだ。(引用)
7	文芸時評 「心の中を流れる河」について	山本健吉	「朝日新聞」 昭和31年11月21日	1956/11/21		三たび主を裏切ったペテロの話の二つの解釈をはさみながら、北の国の小さな町の暗い生活を描いている。聖書の言葉を鏡にして、牧師の世俗性と、その義妹の内面的な孤独とを映し出したのは、巧妙である。(引用)
8	文庫本解説 「死神の馭者」について	篠田一士	新潮文庫「夢見る少年の昼と夜」	1972/8	6	風俗描写の断片をたくみに活用して現実世界のむごさを生々しく暗示するが、作者はそこに決して安住も低迷もしていない。いってみれば、どこにでもあるような平板で、安っぽい日常的な風景の中にも、一種超越的な何ものかが働いているはずで、その見えざるもの、知られざるものを感じ、それによって作品をつくらうというのが作家福永武彦の文学的身上の最大のものである。(引用)

## 4. 大学研究紀要、その他研究録

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	福永武彦「秋の嘆き」論	和田能卓	「解釈学」第9・10巻	1993/6及び 11	6+4	本作品を短編ながら「風土」同様、緻密な計算と構想の上に成ったものと捉え、作品の主題と構想について検討している。筆者は主題を「兄・宗太郎の自殺の原因が父親の狂気にあったことを知り、遺伝による発狂を恐れつつ兄への思慕を胸に孤独な生を決意する早苗」と捉えている。また、早苗に負わされた狂気に対する恐怖感の意味として、福永の文芸観・人生観＝無意識的な生の否定に合致するものがそこに含まれているとしている。(要約)
2	福永武彦「秋の嘆き」論	王 成	「立教大学日本文学」第75巻	1996/1	11	本作品における時間構成に焦点をあわせながら物語の生成について検討している。本論考の要点は概略以下のようである。 ・過去の物語と現在進行中の物語とが交互に組み合わせられ、時間の持続を意識的に断ち切って、過去と現在を交錯させて組み立てることによって読者に時間の再構成を要請する企てを認めることができる。 ・福永は同時期に構想された「二十世紀小説論」で述べているように、早苗の内的時間は、記憶という偶然的無意識によって、読者に認識される。 ・作品の持つ客観的歴史的時間と主人公の早苗の心理的時間を交錯させて物語を展開する小説である。 ・直接話法と間接話法とをミックスさせて、現実世界と作中人物の内面世界の境界をぼかして、作者と作中人物と読者の三位一体を狙う意図が見える。 ・作品のミステリー性が鮮明に印象づけられる。 ・主要モチーフの一つである狂気の遺伝は、当時では一般的に信じられていた(当時出版の本、マスコミの記事を傍証として提示している)。
3	書きなおす人・福永武彦「心の中を流れる河」と『夢の輪』	小林一郎	「文藝空間」第10号 総特集＝福永武彦の「中期」	1996/8	14	(「心の中を流れる河」について) 本篇は、宗教に帰依している者よりもそうでない者のほうが救いを必要としているという主題の短篇だ。(中略) 小説の書法はこの時期の福永にしては比較のおとなしく、かねてからの内的独白は洗練された。だが、人物・視点のロンド的な方法に比較して主題の展開は充分とは言えない。終結は抒情的に定着されているが、これは主題にこめられた苦味を軽減するための作者のサービスではなからうか。余韻と言えは聞こえは良いが、テーマからすればもう少し膨らませて良かった。続篇を期待すると言っても同じだ。この不完全燃焼が同じ素材を用いた別の長篇小説を要求することになった、というのが福永がこれを中篇と呼んだ背景ではなからうか。(引用)
4	福永武彦「幻影」論 ＜ 実体＞無き＜ 人生＞の悲劇	和田能卓	「文学研究」(日本文学研究会)第84巻  福永武彦研究会第1回例会(1995/11/11)における発表内容を改稿したもの	1996/12	7	Kが言う「生きるというのは、そう決心して生きることだ、生きるために生きることだ。幻影のそとに生きることだ。」という言葉が真に意味するのは、＜ 生＞すなわち＜ 人生＞を意識的・自覚的に生きることであり、可能な限り＜ 現実＞と正面から向き合って自己の責任を引き受けて誠実に生きることを意味していたはずである。しかしKは＜ 現実＞に生きるために最も優先的に解決すべきであったA子という過去の＜ 幻影＞＝＜ 絶望＞の象徴と対決することなく、彼女から遁走した。その結果として彼は、人に不可欠なく＜ 夢＞と＜ 希望＞のみならず＜ 現実＞＝＜ 人生＞を生きる意欲・気力さえも喪失し、遂に＜ 魂の死＞に陥ったのである。 『愛の試み』中の「内なる世界」の章における、＜ 無意識に生きることは、殆ど生きることではない。＞、＜ 最も恐るべきなのは、夢のない孤独であり、それは一つの砂漠というにすぎぬ。＞という認識は、Kの姿に重なるものである。(引用)
5	福永武彦 「心の中を流れる河」	黒岩浩美	「成蹊国文」第31巻	1998/3	9	本稿は、主人公梶田梢の心の有りように焦点を当て、「河」の意味とともに、梢の心の問題を中心にそのテーマについて考察している。以下は引用。 「心の中を流れる河」で福永は梢の孤独な心の深淵を真冬の寂代河の風景に重ねて映し出した。この作品における河のイメージは、厳しくはあるが生命力ある力強い河である。河は流れ続けやがて、海へたどり着く。梢はその河の音に一人耳を傾け、自分の心と向き合う。そのことは彼女が今、生存の根源的な問いかけを外に向けるのではなく、自己に向け始めたといえるのではないだろうか。 「心の中を流れる河」という作品は現実の問題の中から神を信じることを求める梢の姿を、十分とは言えないが牧師を対置させて描き出した作品であるといえる。

6	『一時間の航海』(福永武彦)論	栗山嘉章	「長野県国語国文学研究会紀要」第5巻	2002/12	7	<p>作品において、現実から空想への移行(A→B→C)および空想から現実への移行(a→b→c)は3個所づつあり、その具体的な叙述を抜き出して検討を加えている。以下は引用。</p> <p>現実から空想へと移行するA→B→Cの場面に従い、彼女の体温を身に感じるという生身の他者を認識していく過程は、空想から現実に戻るa→b→cの彼女が実際に身体が動かすこと(愛の断絶)とリンクしていく。</p> <p>この構成により、現実から空想、空想から現実への境界を曖昧にし、等質化、同等化していく。それは、現実の愛の不可能性を描くとともに未来の愛の不可能性や断絶を約束することになる。これは彼女の生身の体温に触れたときに断絶するために、より印象づけられている。</p> <p>『一時間の航海』は、愛の可能性としての連続性ではなく、愛の不可能性としての連続性を構成の平明さを意識しながら描ききった小説といえるだろう。</p>
7	『夢の輪』と「心の中を流れる河」の間 — 福永武彦のキリスト教意識についての一考察 —	近藤圭一	「聖徳大学研究紀要」(人文学部)第16巻	2005/12	8	<p>本稿は、「夢の輪」と「心の中を流れる河」との対比について、特にキリスト教意識の面から考察を加えている。以下は引用。</p> <p>「心の中を流れる河」は信仰の限界を描こうとしたもので、ペテロくらいの信仰がないならば、「弱い」自分を「ぬるま湯」信仰で「あつたまって」生かしていくよりも、苦しみながらも己の「心の音」を聞きながら強く生きていくことの方がよいという作者の姿勢が出ている作品なのだろう。(中略)</p> <p>『夢の輪』が『独身者』の挫折を乗り越えようとして考案されたことは、作ろうとした意図、外見的構成を規定した。しかし、そこに盛り込もうとしたものはまさしく「人間」の物語である。『独身者』から『草の花』、そして「心の中を流れる河」まで、姿を次第に変えながら続いてきた、神と対話する人間を描こうとするのではなく、単なる人だけの世界を描こうとしたのである。そのためにキリスト教意識を引きずってきた「心の中を流れる河」は「抹殺」されなければならなかった。それは、神との距離で苦しんできた福永にある結論をもたらした。彼の文学には以後この種の神学論争が見られなくなったのである。</p>
8	墓のある町 福永武彦「廃市」論	西田一豊	「近代文学研究」第26巻	2009/4	15	<p>福永のテキスト群には「土地」や「場所」そのものがクローズアップされた小説がある。筆者は物語形式からそれらを、架空の、あるいは空想の町や土地(nowhere)が舞台となっている作品、例えば「冥府」、「未来都市」、「廃市」を異界訪問譚系列、架空の町が舞台となりながらも、北海道という限定がつく「心の中を流れる河」、「夢の輪」をフオークナーに倣った「サーガ」系列の小説に分け検討している。</p> <p>本稿では、「廃市」に代表されるような架空の土地(異界)が主題化されているものと、土地の年代記を主題化したものとの相違点と、この2系統のテキストがその後たどる経緯を確認し、「夢の輪」の中絶により土地の年代記という方法は放棄され、まったくの架空の土地を主題化する異界訪問譚系のテキストがその後より深化され、その分岐点に「廃市」が位置しているとしている。(要約)</p>
9	短篇小説「風景」論	和田能卓	「解釈」第56-1・2巻	2010/2	8	<p>短篇小説「風景」の主題は、明らかに暗い精神状態が思い描いた&lt;風景&gt;、言い換えるならば、暗い魂が思い描いた&lt;人生模様&gt;だったのであるが、(中略)作品末尾で、&lt;風景&gt;は暗から明へとベクトルを変化させている。(引用)</p>

#### 4. 過去の福永武彦研究会における発表・討議

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
	「鏡の中の少女」を読む	田中鉄也	第57回発表	2007/7		<p>「鏡の中の少女」は、「水中花」「秋の嘆き」に続く、「精神病」をテーマとした作品である。しかし、それらの作品と違い、「精神病」的心理をを外側からではなく、主人公の内面から描いている点に特徴があるだろう。それは、福永自身の療養所生活の中で、強い不安や恐怖によって「現実との生ける接触」を失うという「精神病」の特徴が、むしろ健常者においてもしばしば見られる体験の中から生まれた。そして、「精神病」的心理を内側から描くという態度は、「世界の終り」「飛ぶ男」、さらに「死の島」の萌木素子へと結実するのである。</p> <p>少女・麻里が会話を交わす鏡の中の少女も、決して精神病による異常心理ではなく、むしろ彼女自身がそうなりたいと願い、本当に生きていくと実感できる自己である。彼女が「鏡」の中のもう一人の自分と会話を交わすというのは、彼女が自分自身と実存をかけて対峙しているということである。</p> <p>一方、麻里の父・五百木画伯は、そうなりたいと願うもう一人の自分、つまり「鏡」から目を逸らして生きている。それによって、彼は「現実との生ける接触」を失い、深く絶望しているということが言えるだろう。</p> <p>「鏡の中の少女」は、常人とはかけ離れた「異常心理」を描いているのではない。むしろ、そこで描かれている「異常心理」とは、人が自己の実存の真の姿を直視し、全存在を賭けて対決する中から生まれる大きな不安そのものである。そして、それは私達自身にとって、避けてはならない普遍的な問題であろう。</p>